

## 『福祉開発』の意義と条件

蠟 山 政 道

この記念講演は、昭和41年2月11日、本社会保障研究所開設1周年を記念して行われたもので、蠟山政道先生のお許しをえて、掲載したものである。（編集者）

### I

先日、山田先生から今度社会保障研究所が1年を迎えるに当って若干催しをしたい。その際来て話をせんか、ということでございまして、ちょっと私としてはどのような話をしたらいいだろうかと心中でとまどったのでございます。と申しますのは大概の問題について少しずつかじってはきたんでございますが、社会保障についてはほとんど勉強していないのです。なぜこういう重要な問題について勉強しなかったかということは、今さら自分で考えても不思議なくらいであります。したがいましてお集りの皆さんのようにそれぞれ社会保障の問題については専門的な立場をもっておられる方に対して話をすると、釈迦に説法のようなことにならないだろうかと思ひまして、実は問題をどういうふうなものを選んだらいいかとまどったのであります。

ここでふと思いつきましたのは、ちょうど今年で7回目になるのでありますが、私が議長をつとめておりました民主社会主義研究会議には、武藤教授をはじめ、非常に多くの方々が社会福祉や社会保障制度の問題について研究しているのです。これは偶然かどうかわかりませんが、そこで福祉国家という問題をいろいろの機会に論議いたしましたし、大会でも2回ほど採り上げました。また毎年の会でも福祉国家の問題が出るのでありますが、この福祉国家の問題について、非常に疑問と申しますか、ハッキリしない点を沢山もっておったのであります。しかしだんだんと門前の小僧式にい

ろいろ問題を与えられて、福祉国家という視点から社会保障にも少しずつ位置付けと申しますか、問題の意識と申しましょうか、だんだんと明確にすることができたようなことなのであります。

そんなことでこの社会保障の問題をそれ自身として取り上げることについては、私自身なんらの資格もございませんので、いわば外回りから、あるいはもっとハッキリいえば、門外漢がこの社会保障という問題についてどう見ているかというようなことについてお話をするのが、あるいはお役に立つのかも知れないといったような考えをもちました。

あるときですがふと武藤先生に、「僕は近頃、福祉開発という言葉を使ってみたくなったのです」といいますと、武藤先生はちょっととまどったように、そんな言葉は聞いたこともないというような表情を示されたのであります。しかしそれは面白いかも知れないと半信半疑の体でございました。この言葉についてはまだご承認を得ておりませんし、私自身にも内容のよくわからない点が多いのであります。ただ、そんな言葉を使ったこともありまして、これを一つ専門家の山田先生はじめ皆さんの前で勇を鼓してご披露してみようかという気になりまして、本日の演題をただ今ご紹介いただきましたように、「福祉開発の意義と条件」にきめた次第であります。

一般には「計画」という言葉もよく使われるようでありまして、福祉計画という考えも成りたつでしょう。開発と計画は密接な関係があり、特に私が専門にしております行政学としては、目下一番苦しんでいる問題の一つなのであります。ですから福祉計画あるいは福祉開発計画という概念でもよろしいかと思いますが、何れにしても福祉の問題を中心に私の考えておりますことを申し上げ

ることがいいんじゃないかというので、そんな題を選んだわけであります。

## II

ところでお話することは、簡単に申しまして私自身のこういう問題に接近してまいりました過去の経験をお話するようなことに結局なるのでありますが、その一つは開発という概念にどういう機会から触れるようになったかということでございます。今一つは福祉という言葉あるいは概念に、どういうチャンスから、あるいはどういう契機から触れるようになったかということでございます。この二つの方面から問題へ接近してみたいと思います。

昔話のようになりますが、結局偶然のことで、今日の言葉ではおそらく地域開発という概念あるいは問題に触れる出来事が私の身邊に起りました。大正3年のことでございます。私は田舎の中小企業家の伴に生まれました者ですが、その頃東京に出てまいりました。当時は田舎では米価が大変に下落いたしまして非常な不況に見舞われました。同時に私の郷土は養蚕の盛んな製糸、生糸の産地で、米国その他欧州とも関係があったかと思いますが、やはり第1次世界戦争の前夜の状況のために輸出が止まってしまいました。こうして両面から非常に農村が不況になりました。そういたしますと町の商人が同時に不況に見舞われました。というのは百姓から物が買ってもらえない、また貸した金も返してもらえないということなんですが、私自身が一番、今でも脳裡に消えてなくなるのは百姓の顔であります。私の家なんかによく寄っていろいろの世間話をしてゆきましたし、私もそういうことを百姓と話をするのが好きで、いろんな世間話などを交わしたのですが、どうも百姓たちは元気がない。その顔色もすっかり悪くなっている。今私の覚えている元気のない農民の姿が一方にあり、それに対してやはり町も不景気である。この不景気という問題がいわば今日という開発という言葉の契機でないかと思うのであります。その当時、農村の更生であるとかいろんな言葉はありましたが、ハッキリした開発と

いう言葉は出ていなかったように覚えております。しかし不況をなんとかしろということが、その契機じゃないかと思うのであります。現に私自身もちょうど高等学校にゆきまして、少しずつ本を読む機会を与えられたものですから、このような問題に関心をもつようになっていました。

当時内務省あたりに地方改良研究といったような水野さんなどが中心になってやったものがございました。その『都市と農村』という雑誌がありまして、それを読んでおりますと懸賞論文が募集されている。「都市と農村の調和」という題が与えられているものですから、それを書いてやれという気持ちが起りまして、結局こんなことを書きました。まず農民の顔に元気がないし、また不景気な顔をしている農民の影響を受けて町の商人も元気がない。農村を相手にしている人口3万ないし4万くらいの小都市と付近の農村との関係という問題が、一つここにあるんじゃないか。なんであるかわからないが、とにかく経済関係であろうと思いますが、そういう関係というものが一つここに問題として出てくるんじゃないだろうか。それを一つ、私自身のその当時の身近かな例にひきました。それからもう一つ付け加えました。当時電気館と呼んでいたいわゆる活動写真、今日という映画が非常に流行いたしまして、青年たちが村から自転車に乗ってやっけてまいります。そうすると昼間はいいいんですが、夜になると道が非常に悪い。町はどうやら電気がついておりますが村に入ると電気がないというので、途中で事故をおこすのであります。それが新聞に出ている。そういう例をあげまして、いったいこういう問題は村の人も町の人も一緒になってやるべきじゃないかといったような、非常に無造作な考えであります。どうも現在やっているような農村は農村、町は町という行政のやり方では解決にならないんじゃないかと書いておきました。

当時たまたま農商務大臣をしておりました中小路簾という人が来まして、その不況対策ということについて講演会をやりましたので、私もそれを聴きにゆきました。私共が問題にしている村と町が一緒になって、とにかく借金が返せないならば、

取れないなりの方策を考え、また町の人間と村の人間が道路その他交通を一体になってやるべきじゃないかという頭で話を聞いていると、天皇制のことを説明されておるのであります。天皇というものが国家でいえば——有機体説と思うのですが——つまり頭なんだ、田舎の百姓やなんかは手足のようなもので、手足が1本2本どうなっても大したことはないんだということをいいましたから、私は非常に憤慨してすぐそれを新聞に書いたんです。こんな馬鹿なことがあるだろうかといったようなことを書きましたら、私の親父が町の市会議員なんかしておったので、警察署長からちょっとあれは危険思想だというような注意があったのです。「お前、何書いたんだ」というので、「こういうわけだ」、「それは理屈だけれどもそんなこと町と村がすぐ一緒になってやるわけにいかないんだよ」、ということをお父さんから聞かされ、「いらんことをやたらと書くものじゃない」と叱られたことがあるのですが、実は、そんなことを雑誌の懸賞論文に書きましたら、とにかく金10円也をもらいました。当時の10円は相当の金額であります。伊豆に1週間旅行が出来ました。その旅行で山下義信という今日の言葉でいえば社会事業家ですが、青年指導をしておりましたので、この人の塾を伊東に訪れましていろいろ話を聞いたことがございました。こういったような経験を顧みますと、結局経済開発とか地域開発という問題はその当時からあったんじゃないかと思うのであります。

ところがまた1、2年たち、欧州大戦がたけなわになりますと非常に景気が上昇してきました。物価が、ことに米の値段が石10円まで下ったのがどんどん上ってついに50円になる。当時一高の寄宿舎の総代会で議論したのでありますが、米価が上がったので寄宿舎の費用が上ってくる。今日の消費物価の上り方とは違って非常な上り方で、大正6年に高等学校の寄宿舎を出ましたときには舎費が16円50銭くらい、初めは4円50銭くらいで1月済んだのでありますが、4倍近く上るということは、到底今日の物価上昇の様子とは較べものにならない。

いったいそれでは農村はどうなったかということとありますが、初めの、大正2、3年頃は新聞は「餓殍(がひょう)野に横たわる」というひどい言葉で、当時の農村の状態を説明しておったのであります。今度は「村娘(そんじょう)唇を紅にして」とか書いて、つまり村の娘さんたちも贅沢になったことを非難している。私はこの農村景気も一つ大きな問題じゃないかと思ったんですが、とにかく対外関係が大きく変って日本の貿易その他が変わりますと非常に物価に影響し、村の人町の人の生活が変わるということはどういうことなんだろう、という一つの疑問をもったわけです。それで高等学校で農村問題を論ずとえらそうなことをいって演説をやりましたら、河合栄次郎さんが先輩大学生としてきて、「そんなことを今からやるのはよくない。英国の産業革命史でも研究して語学を勉強し、そういうような歴史を研究してから日本の農村問題や地方の問題というのを勉強すべきなんで、今からそんなことをいうのは早過ぎるよ」といわれました。すぐ先生はトインビーの産業革命史をもってきて、1週間で読めと行って渡されたのですが、これは私が初めて産業革命史を読む動機だったのです。そういったような大正の初め頃の問題というのが、何か私には開発という問題を考える一つの動機ではなかったかと思うのです。

大正7年の例の米騒動のときに、やはりそういう経験をいたしました。ちょうど越中滑川のかかあ共が米屋を襲撃したあの事件が全国に波及していろいろ騒動をおこしたのでありますが、そのときに建部遯吾先生からわれわれに、もし夏休みに閑があるならばこれを一つ調査してこい、何が原因でどうすればこの騒動のようなことが防止できるだろうかというようなサジェッションがありましたので、富山県を旅行いたしましてその結論として私はこういうことを——夢のようなことでございますけれども——考えたのであります。原因は結局出稼ぎということにある。夫が北海道に出稼ぎして送金が十分でない。しかも送ってきた金、つまり所得がそう変らないのに物価は大変上がっている。所得が変らないのに物価が上がっていること

と、夫が家庭から離れているということにいろんな心理的な原因があるんじゃないだろうか。

簡単にいえば出稼ぎなんかしないで、越中の万金丹なんていう地場産業だけでなく、富山県が考えはじめている黒部の開発計画を実行して、電気、電力その他をどんどん出し、地場産業をおこすことだ。そうしてみんなが出稼ぎにゆかないでそこで働けるように、百姓も漁民もそこで働くようになれば解決するんじゃないか。たまたま北イタリアのポー川河域の開発を扱っている経済史を読みました。アルプスの山の中から流れる水力を開発する。白い石炭——ホワイト・コールという言葉を使っていました——が原動力だ。北アルプスや立山には白い石炭が沢山あるじゃないか、この黒部溪谷を開発して水力電気で工業を興すことだ。こんなことを知事さんにいったら、富山県では既に研究調査されておりますとわれわれにいろいろ教えてくれたことを今でも覚えております。

とにかく大正年間の学生時代における、実質的には今日の開発問題でございますが、それを経験といいますか、体験したということがこの問題に対する私の最初のアプローチなんであります。

それからいろいろの変遷がございましたが、要するに経済不況ということと経済変動ということ、これを背景にもってその間に開発という考え方が生まれてくるんじゃないだろうかという考え方を、一応固めたわけでありまして。

### III

戦後になりまして初めてお役所関係と縁をもつことができました。最初に資源調査会に関係しまして、北海道その他の地域開発の問題に触れて、本格的にというほどではございませんが、とにかく初めて取り組んだわけでありまして。

ところがやっぱりお役所の方で調査をされあるいは問題を提起されるのは、非常にお役所の立場というものが既にあることなんです。そうするとつまり簡単にいえば行政という問題がそこに出てくる。ところが住民の生活というかその地元における、あるいは地域における問題はだれがいったい問題として取り上げるのか。もちろんそこ

には地方公共団体もありまた北海道の場合には、それぞれ開発に関する委員会みたいなものができておるのですが、どうもそこには、住民というものがこういう問題をどういうふうに取り上げるかということと、お役所の方で考えるのと大分違うということを感じたわけでございます。

そのうちに北海道の問題が一応片付きますと、今度は特定地域の問題が出てまいります。いわゆる国土総合開発法が昭和 25 年でしか設定されてから、そういうような全国的な計画というものが制定されるようになる。少くとも調査研究という段階に入ってきた。そうすると特定地域といったような問題、たとえばその当時一番日本の経済が要求しておりました食糧資源を開発するか、あるいは電力その他エネルギーの潤渴を解決してゆくための発電計画であるとか、そういうような問題がとにかく重要であるけれども、地域社会というのはどうなるだろうか、特定地域といったようなものは。

こんな疑問を残しながらそういう問題に従事しておりますと、そのうちに経済開発というような言葉が出てまいりました。経済開発というものが全国的にいろいろ進んでまいりますと、北海道を中心にして、あるいは特定地域で進められる資源開発ということと経済開発ということと、どういう関係になるんだらうかという疑問をもってまいりました。それで全国計画というものを、国土総合開発審議会に関係いたしまして勉強している間に、日本全体の経済計画というものと、国土開発という問題との関係をどういうふうに付けたいだろうか、国土の中にも全国的な国土と地域との関係、これも一つの問題としてついにハッキリ頭に割り切れないでいるうちに、だんだんと経済計画と申しますか審議会も二つできてしまいました。経済審議会の方では所得倍增計画というものがだんだん進んでまいります。そうすると今度は国土開発の方もそれに即応するように経済企画庁としては按配するらしいんです。とにかく片方の経済計画が進んでいないうちは国土計画が進められない。そのうちに経済計画ができたから今度は国土計画の方もやってもらいたい、今までかなり

足踏みをして停頓しておりましたところを、今度は進めたらどうかといったようなことになりました、全国計画というものを急にまとめるようになりました。

そうすると全国の経済計画または所得倍増計画といったものと、国土計画およびその国土計画を地域にブレイクダウンをした場合の地域計画とは何か関係があるんだけれども、どうもそれをハッキリ関係付けることは、お役所の関係でどうもうまくできない。しかし何か理論的に考えられるんじゃないか、という疑問をもっていたわけですが、そのうちに政府の方でも地域経済問題調査会というものを作れ、それに入れというものですから山田先生にも入っていただいて作ったわけです。それで全国計画ができたから、それを一応地域にブレイクダウンして9ブロックであろうと8ブロックであろうと、とにかく地域経済対策という名の地域開発計画というものができたわけです。

これも結局、開発開発という名称がいろいろあるが、その相互連関についてはいったい何がそのつなぎになるのだろうか、何が共通点であろうかということは、なかなか掴めずに終わってしまったのでありますが、最近になりまして今度は厚生省方面から社会開発ということがいい出されました。これはおそらく国連のいわゆる「開発の10年」というあの一つのデクラレーションに影響を受けたんじゃないかと思いますが、社会開発という言葉が非常に流行するようになりました。

そうするとこの社会開発ということと経済開発、あるいは地域開発というのはどういう関係にあるのだろうか。開発開発という言葉が盛んにいわれておりますけれども、いったいその開発ということをもう少しハッキリさせる必要があるんじゃないだろうかという考えをもって今日に至ったのですが、そのうちに、開発という問題は、それが地域であろうと経済であろうと社会であろうと何であろうと、開発といっている以上は福祉ということについてもいえるんじゃないだろうか、ハッキリとしないだけにとにかく福祉という形容詞をつけてもいいんじゃないだろうか、福祉開発ということもいえるんじゃないだろうかと思うようにな

ったわけです。

またもう一つそれをサジェストしてくれたのは人間開発ということであります。人間を開発することになれば、人間の問題というのは非常に高度の問題であるし、またある意味では限定されているともいえる。そうなれば福祉という言葉も相当高度な考え方である。武藤さんの実存哲学なんかわからないんですが、とにかく哲学的解明もできる確かに大きな問題であるに違いない。同時に1人1人——家庭でもいいと思いますし、また小家族でもいいんですが、そういうものに福祉が限定される。高度なものでありながら限定されるのであるから、福祉ということについても開発ということがいえるんじゃないだろうか、ということが、一つの私の今日福祉開発という言葉を使った理由なんであります。

#### IV

今一つのアプローチは、福祉国家とかあるいは社会保障制度とか、いろいろにいわれている福祉そのものの問題なんであります。これはちょうど1926年頃でございますが、マッキーバーという社会学者でもあり政治学者でもある人の本が出ました。この本は、現代国家の機能、そのファンクションの変遷の順序を、簡単な抽象的な表現でありますけれども、秩序と保障あるいは保全および開発、このオーダーとセキュリティ、それからディベロプメント、この3段階のトランスフォーメーションをうまく説明している現代国家論だったので、これを読んだときに、広い意味の近代国家の機能の変遷というようなところに、一つの問題として開発という言葉を見出したわけなんであります。しかし、それならばその場合に保障あるいは保全という問題と開発との関係はどうなるのだろうか、セキュリティというのは開発の前の段階なんであって、それがやがて開発ということと同時に含んでいるのか、あるいは次の段階に進むのか、という疑問をもったのでございます。

この疑問は最近になっても残っているのですが、そこへ福祉国家論というものが出てまいりました。そうしますとその福祉国家論が、他の国家と違う

点として説いている国家の機能は、社会福祉というところにあるのだろうか、あるいは社会保障というところにあるのだろうか、という疑問をもったわけなのであります。その場合の福祉というのは単なる保障というだけではないように私は考え、もっと広いまた高度のものと考えたわけです。

ところで英国の社会保障と申しますか、と同時に社会保険の問題でありましょうが、こういう問題には、ロンドンスクールに勉強しておりました時に接するようになりました。たまたまベバリッジさんがディレクターをしておりました関係からなのですが、1925、6年頃にベバリッジさんがロンドンスクールにまいります前に、ロイド・ジョージあたりの失業保険等をやられたときの経験を、何度も聴く機会を得ました。やがてベバリッジ・プランができましたのでありますが、それはまだその時は知りませんでした。しかし、先生の警咳に接したということからベバリッジ案あるいは計画というものを、少しずつ勉強する機会があったわけでありました。

その場合に一つの問題点になりますのは、保険という問題と、そうでなくそのサブシステムとの問題の関連であります。簡単にいえばマーケットといえますか経済の流通関係、あるいは貨幣的な取引関係、そういった原理というものがどこまで社会保障には重要性をもっているのか。そうでなく国家が一応総ての国民が国民であるということにおいて、特定の企業における労働者であろうと、あるいは国家自身に奉職しているところの行政官であろうと同じなんだ。国民であるということにおいて国家はそれに対して何等かのセキュリティを与えるということになるのではないだろうか。そういうような意味における一種のユニバーサリズムというものの意味、それはウェルフェアーということなのか、あるいはベバリッジの謂う人間生活の欠乏であるとか、無知であるとか、不潔であるとか、人間生活としての福祉を妨げているものを除去し、それを防止するというこういったような人生のいろいろの障害あるいはクライシスに対する対策であるという意味。そこらに社会保障制度の重要な点がありはしないか。まあこんなよう

な気持ちをもってずっとみておりましたところに、最近になりましてからベバリッジ案に対しましていろいろな批判が出てまいりました。たとえばクロスランドあたりはいろいろ *Future of Socialism* の中に書いておりますし、また最近、批判というよりも社会科学的な解明として T・H・マーシャルを読んだらいろいろ批判がある。なにか、社会保障制度なるものが一歩進んで社会構造というか、あるいは社会集団の相互連関というか、そういう社会のストラクチャーの問題を背景としてだんだん考えてきておるように思う。

そういうふうになりますと問題はいわゆる社会保障といったような制度的なものでなく、その制度も一つのサブシステムとして考えられるもっと広い意味のソーシャル・システムというものが考えられるのではないか。そういうことを社会学あたりが最近英国でも取り上げているのをみると、ここに一つの新しい発展がありはしないか。

そこで福祉国家論をみた場合に、福祉国家というものが一つのパワー・ストラクチャーあるいはソーシャル・ストラクチャーをあるベースにしたところの国家なのか、いったいどういうクライテリアをもってこの福祉国家をみたらいいのか、という疑問をもっていたのですが、福祉という概念が社会保険とか社会保障というものをこえて、何か一つの発展をしているのではないかと考えるようになりました。そこに前にのべた社会開発が最後にくっ付いてくる。前のいろいろと開発開発といってきたのが最後の段階において社会開発までくると、社会開発というものを媒介として社会保障制度がまた拡がってくるというふうに考える。

そうするといろいろ発展段階をもっておるところの開発計画、あるいはこれを行政でいうならば、開発行政というものが進んでくる一方、片方は福祉の概念がセキュリティからいわゆる開発に進んできて、社会保障制度の総合化とでもいえるものに近づいてくると考えられる。しかし、総合するゴールセッティングは福祉というもっと広義のものになる。そういうふうに二つのアプローチがあって、その両方が接近してきているんじゃないか。

## V

そうすると、それを結びつけるものは何だろうか。そこに福祉という概念をもってくることに、おいて今度は福祉開発ということ、あるいは社会保障というよりも福祉保障といった方がいいんじゃないか。そこで福祉という概念で二つのアプローチを結びつける一つのゴールをセットしたらいいんじゃないか。こういうのが私の夢のように考えていることでございます。

その場合に結びつけるパワー・ストラクチャーはどうなるのか。そこに大きな障害がありはしないか。そのパワーは簡単に申しまして人間が人間として、少なくとも個人としてあるいはファミリーとして全く自由であり平等であるような社会、簡単にいえば市民(シチズン)でなければならない。したがってそのシチズンの自発的な、個人的に自由な行動が、そういう大きな問題に対する影響力をもつようになるようにならなければならない。簡単にいえば、民主主義というか、民主化が進んでいって、階級的対立、あるいは集団的ないろいろな阻隔対立を解消するような、一つの方向に向ってシチズンというものが実現してゆく。そういう権力構造または政治体制の変化が一方期待されなければ、仮に福祉という価値体系を考えましても、それだけではそれを支えるものがない。戦後 20 年間、民主化ということではいろいろ発展がみられた。それは主として一つは消極的ではあるけれども公共行政というものが民主化されたということ、今までの官僚ではない、本当に国民のためにサービスをする、いわゆるパブリック・サーバントであるという方面で、行政の民主化が行われたことに認められる。

今一つは議会政党が国民の代表者として政策の決定力になるという、議会制民主主義という権力構造の変化が一応認められる。しかし、選挙区に基盤をおく議会政党だけでは社会構造の複雑な内部的な関係というものから生まれてくる対立、闘争といったようなことは除去できない。ここに日本の大きな問題があって、仮に福祉開発という一つの概念が設定されても、それを支える条件とい

うものはあり得ない、ということから、そういうソーシャル・グループの相関関係を超える、あるいは対立関係を超える市民という概念、つまり権利は主張するけれども同時に義務も考える、国家も考えるけれども地域も考える、また同時に自分、すなわち少なくとも自分の家庭についての責任をちゃんと考えているようなシチズン、そのようなシチズンあるいはシチズンシップというものが出現し発展してゆかなければいけないんじゃないか、と私は考えております。

それが幾つかの大きな障害にぶつかってシチズンというものがハッキリ掴めない。ただ、いろいろの大きな影響力はまだもたないけれども、消極的にはシチズンというものが融け合って出現すると、やっぱりシチズンの声に政党であるとか議員であるとか、あるいは権力を握っている人たちにも影響する。つまり消極的な場合でありまして、東京都議会なんかそれでありまして、積極的にどうするということはありませんけれども。

いま一つは本当に篤志家という形で身体障害者とか、リハビリテーションには隠れたる努力をしている人がたくさんあるわけです。毎日のテレビ、ラジオ等の記事を見ますと、そういう篤志の人たちの努力が、別に法律があるわけではありませんし、条令があるわけではありませんが、本当に個人の気持がシチズンとして出ているわけです。そうしていろいろの苦勞をしていろいろの施設を作ったりしているわけです。これは非常に尊いと思うのです。

だれかの言葉ですがインディヴィジュアルあるいはシチズン・サービスなのであって、法律や公の機構をバックにしたスターチュートのサービスではありません。スターチュート・サービスだけに頼ることはいけないのだということをいっている人がありますが、その通りでありまして、日本でも隠れたサービスが本当に人間そのものを対象にしております。単なるカテゴリーを相手にしているんじゃないんです。法律によってこのカテゴリーに属する人には保険をどうするかということではないのです。1人1人の人間そのものが、それとじかに当たっていると黙ってられないのです。そ

うという人がたくさんいる。そのボランティア・アクションというかサービスを組織化してゆくということが、いわゆる市民時代ではないか。

それを適当に国家としてはあるいは行政機構としては法制化し制度化してゆく、国家資金を導入するというふうにゆくべきじゃないか。そのバランスをどうするかということはいろいろ問題がありましようが、しかし気持としては、例えば部分的であり非常に程度の低いものであろうとも、現実そういう努力を払っているということは非常に貴重なことではなかろうか。

したがって民主主義の社会を考えた場合は、その個人の行動というものが、単に政府なりあるいは公の機関の決定に同意を与えるだけでなく、自らやること、それをもっとも合理的にやるということが必要なんじゃないか。

そこで私は、政府の機関であるところのこういう社会保障研究所あたりの批判になると恐縮ですが、こういうものばかりに専門家が努力しておったんじゃない、専門家としてはそのサジェッションとかあるいはエキスパートとしての知識を、そういう人たちを助けてやるように生かさねばならない、個人のボランティアな活動を助けるように、専門家が活動しなければならぬんじゃないか。私はそんなような方向を打ち出すことが、福祉開発の一つの条件として必要なんじゃないかという気がするわけです。

## VI

結局アプローチといたしましては、歴史的に発展段階をとってきましてところの、開発開発と重ねてきましてところを最後に総合するところに福祉開発をもってくる。そこに経済との関係をどうするか、これらについては非常にたくさん問題があると思うのですが、たとえば一番政治的な障害になりますのは、おそらく企業家と労働組合が福祉開発ということにいかないことだ、と私は思う。たとえば経済開発あるいは経済成長とか経済計画には非常に興味があるでしょうが、いよいよ自分たちの生活に関係してくるとか、自分たちの直接賃金その他の問題に影響してくると、労働組

合としてはすぐ時間の関係でゆくとか、経済的な考慮しか払わないのでなかなかうまくゆかない。たとえば所得政策というところまで歩み寄らせるというようには、なかなかいかないと思うのです。そういうふうですから、労働組合とか企業者の団体などもっとも有力な団体は、なかなか社会開発あるいは進んで福祉開発までゆかない障害であると思います。それを突破する道、それを超えてその限界を示すのは何の組織力ももたない、組織の背景をもたない1人1人のシチズンであると思います。

それは実に今は弱いものでありますが、しかしそのシチズンの動きが一つの具体的な問題として非常に大事ではないだろうか。また行政官庁自身でもそれぞれの制度的なジュリスディクションに捉われておりますが、それを超えたそれを包んだ大きな社会開発とか福祉開発という問題で、それぞれの持場持場の位置付けをするようにもっと総合調整をすることができるならば、すすんでそれが役所の機構にも現われるべきじゃないか、少くとも内閣段階あたりで総合調整のできる機関が、もうできていいんじゃないか。ところがこれはなかなか実現いたしませんで、私ども今井さんなんかと一生懸命やりました臨時行政調査会のようなものなんか棚上げであります。現国会でもそんなことやっている関があるか、もっとたくさんいろんな問題があると議員たちはいっておりますし、役所もそれぞれ自分たちのもちまが潰されることにはレジスタンスをする。こういう一つの大きな障害があるのですが、そういう障害を乗り越えて、あるいはそれらに反省を与えるものはやっぱりシチズンだと思います。これは夢のような話ですが、日本国民に生まれたこと、日本国家のメンバーということだけで一定の権利が要求できる、また一定の責任をもっている、こういった社会が考えられないものだろうかという一つの夢のような考え方をもっているわけでありまして。

今までお話したことは一応私が今日まで経てきました巡礼のようなものではないかと思うのですが、最近四国八十八カ所の巡礼記を読んだのであります。その人は信仰の人ですから一生そのため

に費したらしいのでありますが、八十八カ所ですからおそらく生涯の半ばをかけたんじゃないかと思います。ところが最近たった2日で八十八カ所をバスでゆけるそうです。飛行機で行けば1時間くらいで全部回れるんじゃないかという非常に科学技術の進歩した時代において、そういうような一つ一つのたどたどしい巡礼をしてきた人間の話は役に立たないだろう。

しかし一方考えると北海道までいろいろ苦労しながら旅をした昔の人と違いまして、たった1時間半で北海道にいて雪景色を眺められる人が、東京湾のような悲劇を起こす。そこにあるものは涙しかない。この便利さ、この便利からくところのレジャー、その楽しみの背後には、あるいはそれにつきまといているのは拭いても拭えない涙、この一つの矛盾をわれわれはもっているんだ。どんなに技術が進歩しようと、科学が進歩しようと、そこには人間の気持というか、人間の本当の感情を満足せしめるものは科学の世界にあるわけではありません。そうかといって科学の世界から逃避しようというわけではありません。科学の世界を人間の本当の幸福に、あるいは福祉にもってくる方法を考えるべきだと思いますけれども、何れにしても人間の世界にはそうした矛盾というものがあり、それにわれわれは悩まされているわけであります。

そういう二つの世界は、スノウのいわゆる二つの文化であって、冷たい科学の数字と、涙や嘆きを伴うような感情の文字とはすぐは一致しないんだということも承知しておりますが、しかし人間の福祉という一つの高度の、高次の価値目標から、この二つのカルチュアを総合することが決して不

可能ではない。また偉大な社会というジョンソンの言葉を使えば、その建設はこの二つの道を統合する以外にないんじゃないかと思います。

もちろんアメリカでもミュルダルのいうようにあのジレンマ、黒人のあの社会問題をまだ解決しておりません。いつの日に世界は福祉開発という問題の解決に向い、福祉の世界をつくり上げるか、これはまだわれわれの夢だと思います。しかし夢やビジョンをもたなければ、われわれの毎日の生活の生甲斐が出ないんじゃないか。毎日毎日が苦しくて、将来はこういう楽しみがあるんだという夢を追っているところに、むしろ今日の苦しみや今日の困難を打開してゆく情熱も生まれるんじゃないだろうかというような気もいたします。現実には日本の社会保障制度にからまっているところの問題は、一つ一つ非常に難しい問題だと思いますが、だがそれを超えて一つの高次の問題をもってゆくということも、非常に意味のあることではないかと思うのであります。

何時の時期かわかりませんが、あるいは21世紀のことかも知れませんが、今日の時代からそういう時期のくることを翹望しながら毎日の努力をしてゆくのも、意味があるんじゃないだろうかというようなことを感じまして、今日皆さんに釈迦に説法のようなことでありますが、私の過去50年に経験してまいりましたことをご参考に申し上げることができましたことを、非常に幸いに思います。

この研究所もできましてわずか1年であります。3冊の雑誌を拝見して勉強させて貰えましたことをついながら感謝申し上げまして、私の今日の話を終りたいと思います。